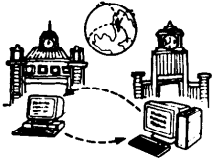


巻頭言



変化の時代と学会の活性化について

小林 亮†



新年明けましておめでとうございます。本年が会員の皆さまにとって良い年になること、ならびに情報処理学会がますます発展することを祈ります。

さて、最近の国際情勢は激変の時代を迎えており、東西ドイツの統一やソビエト連邦の解体など数年前には予想も出来なかったような事態が次々と起こっている。今年は何が起ころのかまったく予想出来ないといっても過言ではないと思われる。しかしながらこれと同様の激しい変化が今、情報処理の分野でも起こっている。ダウンサイジング、オープンシステム、UNIX、マルチメディア、オブジェクト指向、ネットワークコンピューティング、RISC、等々この変化を特徴付ける用語は多々ある。そしてシステムの考え方は集中処理から分散処理／エンドユーザ指向へと移行しつつあるし、ソフトウェアや標準の重要性が以前にもまして強く認識されるようになった。これらの変化は情報処理産業の構造や企業における EDP 部門の在り方にも変化を与えつつある。また、日本の力が強くなるにしたがって海外からの期待が高まる一方で摩擦も増大している。

そんな新しい時代の中で情報処理学会は、先進技術の研究者、ハードウェア／ソフトウェア／システムの開発技術者、情報処理システムの利用者などがそれぞれの立場で持っている悩みや疑問に答え、進むべき方向を示唆する役割をもっと積極的に果たすべきであろう。現在当学会の会員数増加は頭打ちになっているが、世の中の状況からすればもっと会員が増えてもおかしくない。当学会の活動をもっと活性化し、魅力のある学会にして行く必要性を痛感している。

日本は技術導入に基づく応用技術開発という従来のパターンから基本技術、基礎技術の自主的研

究開発を必要とする時代になっており、オリジナルな研究や技術を育てることが期待されている。それには日本の研究活動を活性化しなければならず、たとえば当学会の研究会活動などもさらに盛んにすべきであり、そのためには、各研究会をもっと自主的に運営できるようにすることも一案であろう。最近、国際会議や海外と共催の学会など国際的な活動は激増しているが、世界的な日本への期待の高まりの中で当学会の国際化を積極的に進めるべきだと思う。その一方で英文誌は購読者が増えず存続の意義が問われている。情報発信源としての英文誌の役割は重要だが部数が少なくしてはその責任を果たせず、抜本的な改善が求められている。

社会が変化に速やかに対応し新時代へスムーズに移行出来るよう側面から支援するなどの社会的役割も当学会に期待されている。大学などと一緒になった情報処理教育改革の推進、標準化の推進、さらには新しい技術の普及促進のためのセミナーの開催など、もっと積極的に活動を拡大していくべきだと思う。また、3万人を超える会員の大多数にとっては学会との唯一のつながりは毎月の学会誌でありそれらの人たちのニーズを反映した学会誌にするための継続的努力も大切である。

以上のような活動を盛んにすればするほど学会の財政的な負担も増大するが今の学会の財政は非常に苦しく余裕はまったく無い。しかし安易な会費の増額は許されないので各活動を展開するなかで独立採算的な考え方の採用や収入増のための出版事業の拡大などを考えることも必要であろう。

以上のように学会の活性化には多くの課題があり私もその解決に向かって努力する決意である。会員の方々のご理解とご支援をお願いすると共に、ご意見をお聞かせいただければ幸いです。

(平成3年12月4日)